

# 道 どうひょう 標

*d o h y o*

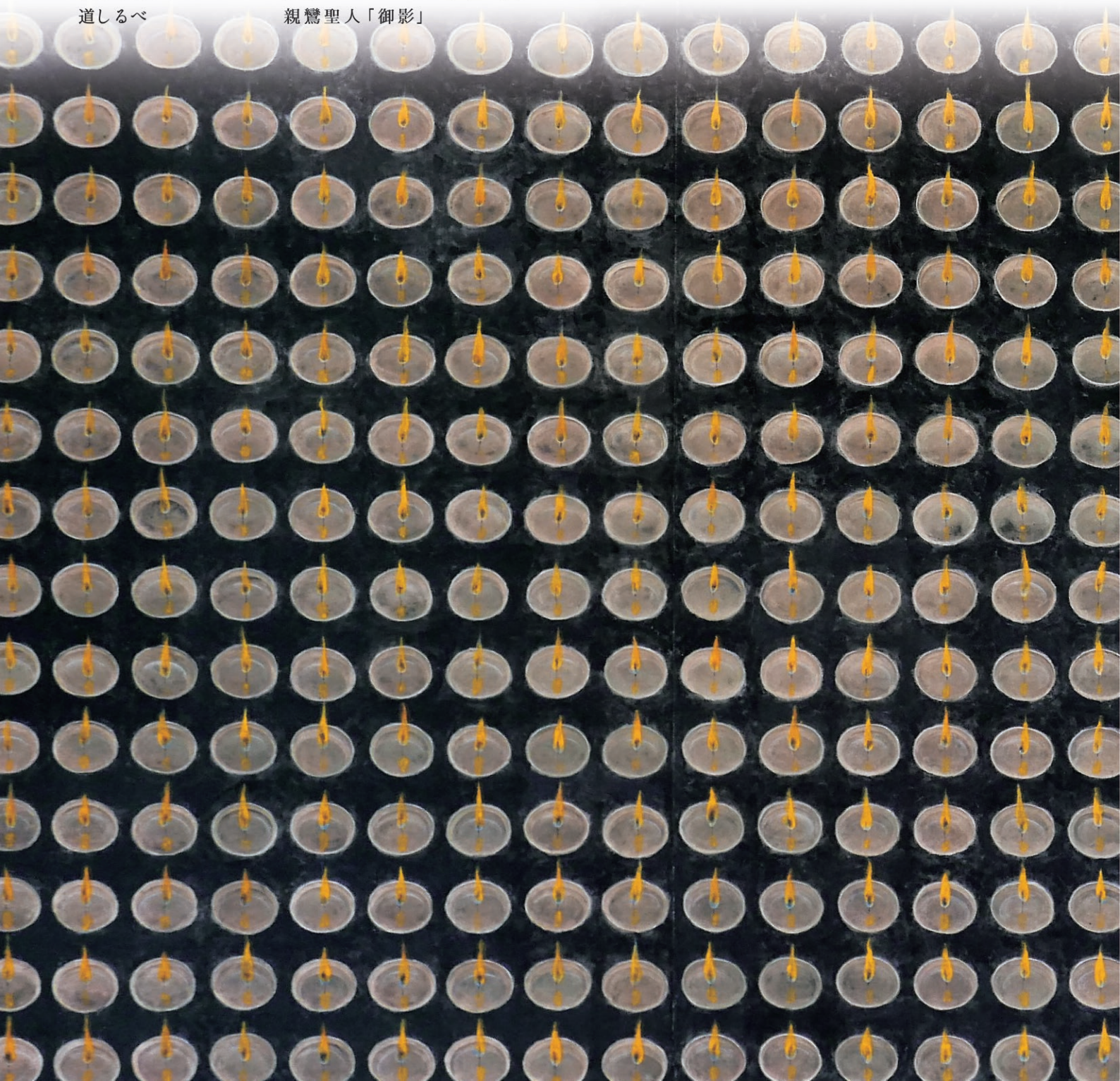
年間特集「まつり」

第一回・縄文の祈り 吉澤 大淳さん

連載

あなたのいのちの物語 弱さのなかに現れる神  
伝承を科学する 序破急のひろがり—雅楽から能へ  
道しるべ 親鸞聖人「御影」

2022 冬季号



年間特集

「まつり」

## 縄文の祈り

## 第一回 吉澤大淳さん



調を行う諏訪大社最大の祭儀であり、その勇壮さと熱狂は天下の大祭として全国的にも知られる。

古く八〇四年、桓武天皇の御代から、信濃国一国をあげて奉仕がなされたとされ、現在でも諏訪地方の氏子二十万人以上がこぞって参加し、熱中する祭である。春に大社の御柱祭が無事終わると、秋には諏訪地方の各地域にある小宮と呼ばれる神社でそれぞれの御柱祭が行われ、一年が終わる。

諏訪の地には、太古の気配をうかがわせる祭礼が多くある。「古事記」には、タケミナカタ（建御名方）が、諏訪に逃れて鎮座したと言う「国譲り」の神話が残るが、古からの地域伝承や記録が伝えるのは、蛇神、竜神、風神、狩りの神など自然に対する畏怖に形を与えたものが多い。天変地異が生死に直結した頃、荒ぶる自然は神そのものだった。

新たな時代「令和」最初の諏訪大社式年造営御柱大祭が今年、令和四年（壬寅）に斎行された。

縄文中期（約五千〜四千年前）、八ヶ岳山麓から諏訪湖畔に及ぶ地域は、多くの集落から豊かな文化が発達

し、日本列島で最も人口が多く栄えた地だという。縄文時代の遺物として初めて国宝に指定された土偶「縄文のビーナス」は、当時の地域の繁栄を物語る独特の美しさを備えている。

また「マムシの這う深鉢」と呼ばれる土器に代表されるように、縄文中期の八ヶ岳山麓において、蛇の文様は繰り返し表現されるテーマであった。死と再生、子孫繁栄の象徴とされる蛇が這い回り、とぐろを巻き、獲物を襲う。その動きを形象化した深鉢型土器は圧巻である。日本にはまだ文字も存在しない時代に、現代の私達には理解の及ばない複雑で独特な文化が生まれ、様々な陰影を映し出してきた。

諏訪大明神画詞（室町時代）には、御柱祭が平安初期に始まったと記されているが、縄文時代に御柱の起源を求める研究者も多い。縄文時代の日本列島の文化は、木と土によって形成されていた。土器のような生活道具だけでなく、実に多様なデザイン



国宝 土偶「縄文のビーナス」  
（茅野市尖石博物館蔵）

ンの美しい土偶が各地で出土している。縄文時代には既に、大木を切り出して何かしらの建造物が作られていたことが明らかになっており、御柱の祭礼のイメージに近いものを抱くことも不自然ではない。

岡本太郎が諏訪の御柱祭に熱中していたことはよく知られる。岡本太郎は大陸文化が流入する前の縄文時代に、日本人古来の美意識を見て「縄文土器論」を著している。その日本探究の下地があったから、御柱祭に日本人の信仰心の源流を感じたのであろう。岡本太郎は御柱祭に参加した夜「諏訪は縄文からの文化が永々続き御柱も古代を伝えている」「千年以上の歴史を持つ御柱がいいのは千年以上経った今も変わらないからだ」と語っている。

## 太古の気配をうかがわせる諏訪の地

岡本太郎は最初に御柱祭に参加した昭和49年、下社春宮すぐ近くの田んぼの中に鎮座する「万治の石仏」

を見て、「こんなに面白いものは見たことがない」と絶賛した。江戸時代、春宮の鳥居に使おうと石工が巨石にノミを入れたところ、血が流れ出た。そのため石を供養しようといふ。弥陀仏を刻んだと言いつた。大きい自然石に小さな頭石が乗った不思議な姿の石仏は、岡本太郎による再発見により新たな関心呼び、観光スポットとしても定

## 生きとし生けるもの皆が共生する縄文文明

着した。このような素朴な石仏が生活の中で人々に大切にされているのも、土地柄なのかもしれない。

詳しいことは何も断定できないが、諏訪の信仰の根源に古からの自然への畏敬があることに異論はないように思う。現代においても、寒さ厳しい冬になれば諏訪湖の御神渡りに皆の関心が集まる。御神渡りは厳寒により結氷した湖で氷が収縮と膨張を繰り返すことで湖面に亀裂が入り、氷がだんだんとせり上がる現象である。諏訪大社は諏訪湖を挟んで上社（前宮・本宮）と下社（春宮・秋宮）が向かい合っており、上社と下社を繋ぐ線上に氷が盛り上がった道が走って、上社の建御名方神が下社の妃八坂刀売神のもとへ狐の使わしめを連れて通われるのだと言いつた。

御神渡りの伝説も御柱祭も、諏訪に住む私達にとつ

ては当たり前のように生活の一部となっているが、千年以上も前から神事が脈々と続き、今なお廃れずに諏訪の人々の生活の一部となっていることは驚異的なことと思う。人の手で山から大木を切り出し、木を曳く為の綱を打ち、木遣りを唄って皆が一つになつて柱を引き建てる、その技術と知恵の伝承が、祭祀という複合体の中に反映される。受け継がれてきた祭が地域の連帯感や高揚感を生み、住民の精神的支えになつており、この祭を通してこの地で生きていく意志を改めて持つのだと、御柱祭に参加してつくづく思う。御柱祭は、人は自然の中で生かされていると言う根源を見つめ直すよい機会と言う歴史学者の言葉は印象的だ。

諏訪信仰が伝える自然への畏れと感謝の念に対し、どれだけの人々が神々しい感慨を抱き、信仰を紡いで



万治の石仏

多かつた。多くの人々が困難に直面している。苦難に満ちた今を生き抜くため、至心に祈りを捧げ、平安な

毎日を送りたいものである。

\*印 写真撮影 坂口清一

吉澤大淳(清) 書家

日展(書) 会員・審査員。

日本ペンクラブ会員、

著書に「千里萬感」「玉笛譜」等。

書画集に「日本の四季」「日本の美と心」「水墨の心象」等。

下諏訪町で開催された「陽明文庫名宝

展」(1996)「こんにちは岡本太郎

さん」展(1999)の実行委員長を務める。



御柱祭(平成28年下社山出し、「諏訪の心一つに」吉澤大淳書)

「弱さのなかに現れる神」

遠藤周作

## 「札の辻」

江戸時代、都市の入り口に「札の辻」と呼ばれる場所があった。東海道から江戸に入る芝口の札の辻は二六二三（元和九）年にイエズス会のデ・アンジェリス神父、フランシスコ会のガルベス神父、ジョアン原主水（もと）ら五〇人が火刑で殉教したところである。カトリック教会では元和のキリシタン殉教とよんでいる。

この短い物語の主人公は「男」とよばれているが、おおよそ二〇年前に上智大学で学んでいたとき、この札の辻でのキリシタンの殉教について学んだことがある。キリシタン研究会で日本史を研究している日本人教員がその話をしたのは、戦争へ向かう時期の抑圧的な状況への抵抗の意味もあつただろう。

そのとき知り合ったのがネズミというあだ名のドイツのユダヤ系の神父である。教員ではない事務職でい

つもおどおどしているの、このあだ名がついていた。実は、その前に男はネズミと出会う機会があつた。校舎の廊下で配属将校に礼儀を欠いたという理由で軍人勅諭を述べよと言われ、口ごもつたところを激しく殴られたのだ。それを事務室の戸のところから見ていたネズミを、配属将校は廊下に引き摺り出したのだ。何もできずに傍観しているかのようなネズミから眼をそらし、男はそこから出ていった。

研究会の後の男の感想が記されている。「殉教者たちの話も男にはこちらが雨なのにもこうだけ、陽のあたつている丘を遠望しているような気がした。昔の信仰のある人というのではなく信仰などのない自



元和キリシタン遺跡 東京都港区三田3丁目

分とは本質的にちがう意志の強さと生来の剛毅さとを兼ねそなえた人間にちがひなかつた。ひよつとすると、それは狂信ではないかとさえ思った。ただ教師が彼等の最期を述べた時、男はなぜか、先日の夕暮、人影のない学校の廊下で中佐に殴られたみじめな自分の姿をくるしく思い出した。」

そんな男を追いかけてきたネズミが札の辻はどこだろう、いっしょに行きませんか、と誘つた。二人は昔の刑場の跡に立ちながら、往時を思い起こそうとする。信者でもない男だが、横目にネズミを見ながら、「日本に來た修道士である以上異国の殉教者の信念と臆病な自分の性格とを引きくらべてきつとたまらない恥ずかしさを感じているのだらう」と想像する。戦争が激しさをますなか、その後、ネズミはドイツに帰されたという。

二〇年後の現在、男は同窓会で世間ずれしたかつての友人たちになじめない。やや除け者になつたように感じている男は、教員になつた友人からネズミがダツハウの收容所に入れられ、「同じ收容所のユダヤ人

が飢餓の刑に処せられた時、この修道士は身代わりになつて罰をうけ死んだ」という話を聞く。

あの臆病なネズミが殉教者と同じように死んだ。どうしてそこまで彼は変わったのか。都電に乗つて競輪新聞を読む青年や居眠りをする娘に目をやりながら、男はそこにネズミがいるかのように感じた。

暴力的支配が猛威を振るつた20世紀の中頃、神は姿を隠してしまつたように思えた。だが、そのような暴力に翻弄される身近な人々のなかに、神が姿を現すことがある。自らの弱さを痛切に知ることが、そのような神に出会うことを可能にする。作者はそのような信仰のあり方を探りあてようとしているのだ。

## 島園進（しまどのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーンフケア研究所客員所長。著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくつて、もいいますか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

# 伝承を科学

学

する

## 序破急のひろがり—雅楽から能へ

序破急は、雅楽の音楽形式をあらわす言葉である。「序」は導入部分。拍節あるいは拍子が明確ではない自由リズムの部分。つづく「破」は、明確な拍子（拍節）をもつ部分。拍子は最初緩やかで、次第に速くなっていく。「急」は文字どおり、急速な拍子で演奏される部分。曲全体を締めくくるフィナーレである。

こういった音楽形式の言葉を、能楽を大成した世阿弥は、演劇の場面展開を説明するために用いた。能の最初に登場するワキが名のり、状況説明を行う部分を、世阿弥は「序」に見立てた。神能の（高砂）であれば、神主（ワキ）が登場して名のり、播州高砂の浦へと旅立ち、到着するまでの場面がそれである。

つづく「破」を、世阿弥は三つの段にわけた。まずは破の二段目。（高砂）であれば、ゆったりとした音楽にのって、老翁（シテ）と姥（ツレ）が登場し、松の長寿を称える歌をたつぷりと歌う場面が、それにあたる。

歌い終わったシテに、ワキが言葉をかける所からが、破の二段目。ワキとシテの両者が交わす言葉にはやがて旋律がつき、デュエットや合唱へと進んでいく。

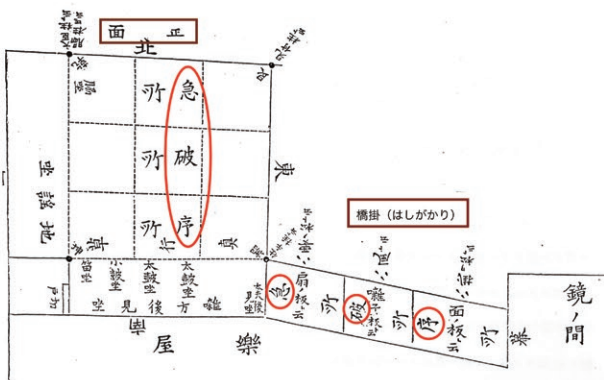
破の三段目は、シテひとりに焦点があたる部分。シテは長いまとまった物語を、囃子のリズムにのせて語る。語り終えたシテは、ワキに言葉を残して消失する。前場が終わるまでが、破の三段目である。

世阿弥は、後場の全体を「急」にあてる。（高砂）の後場では、太鼓がリードする華やかな音楽にのって、シテ（住吉の神）が颯爽と登場する。和歌の伝統を讃えたのち、急テンポの神舞を舞い、天下の安泰を讃えてフィナーレとなる。

音楽用語であった序破急を演劇に転用した、世阿弥のセンスがよかつたからだろうか、序破急はその後、さらに小さな単位、たとえば、ひとまとまりの舞や謡にも、また短い歌の一句あるいは舞台を歩む数歩の足運びのまとまりにも、あてはめられるようになった。

図に示したのは、江戸時代の舞の技術書の中にある能舞台の図である。橋掛の部分、揚幕に近い所から舞台に向かって、序所・破所・急所の三つに区切られている。さらに舞台そのものも、後方から前方に向かって、同じく三つに区切られる。

橋掛を歩んで登場するとき、また舞台の後方から前方に向かって歩み出るとき、シテは、その歩調を次第に勢いづかせる。それは「緩から急へ」という連続的变化であって、



能舞台を「序破急」に見立てる図 『能楽道集』より

そもそも明確な三段階の区分などではない。だが言葉としては「緩急」よりむしろ「序破急」が好まれて普及した。「序・破・急」の三語の組み合わせは「天地人」や「真行草」などのように、上等に見えるからだろうか。ちなみに「序破急」は、茶道、花道、武道などの諸芸においても使われるようになった。

一般に音楽の基礎には、安定したテンポ（雨垂れ拍子）の流れがなくってはならないが、同時に「緩から急へ」という変化が加味されなければ面白くない。そこに意識を向けさせる言葉が「序破急」であろう。思うにわれわれの人生も、混沌とした幼少期からはじまり、やがて歩調が定まり、終わりに向かつて加速するという流れがある。スケールは異なるものの、その流れはまさに「序破急」のようだ。

藤田隆則（ふじた・たかのり）

一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

◆ 親鸞聖人「御影」

親鸞聖人存命中の「御影」（肖像画）は「鏡の御影」と「安城の御影」が伝わり、他に往生直後に描かれたという「熊皮の御影」がある。「鏡御影」は聖人70歳頃の姿といわれ、墨色の線描で下書きのように見える。

「安城の御影」は83歳である。「安城」「熊皮」の二幅にはいくつかの共通点がある。まず、着衣は「黒衣・墨袈裟・白の帽子」（黒の衣に黒の袈裟、白い襟巻き）である。いま一つは「鹿杖」（桑の又ふりの杖）。「鹿杖」は空也上人を慕った鹿の死後、上人がその角を杖の先に付けて用いたことがはじまりとされ、後に「聖」の持ち物と定着したものである。もう一つは敷物に毛皮が用いられている。

この姿によって聖人が関東へ移住されたことには、善光寺の「聖」との深い関わりが推測される。善光寺には聖人百日の参籠の伝説があり、本堂には「親鸞聖人お花松」と呼ばれる大きな松が供えられている。また、真宗高田派の下野の専修寺は聖人が将来された一光三尊の善光寺如来を本尊とされ、松一本の供花など善光寺との共通点が見られる。ただ、親鸞聖人自身が「聖」の勸進活動に関わ

つたとは考えられないが、北関東における善光寺聖の教学的先達として迎えられると思われる。

「聖」は寺の信仰面だけでなく、経済的な面にも大きな役割を果たし、そのみならず、組織性を生かして河川の治水、橋の掛け替えなどの大仕事を資金、工法などの面からも支え、現代の大手ゼネコン顔負けの実力を有していた。源平の合戦で焼け落ちた東大寺大仏の再建勸進を指揮した俊乗房重源も真言宗系の「聖」であった。

「聖」の勸進圏には狩猟を生業とした人びとも多くいた。敷物に描かれている「熊皮」「狸の皮」は、寒さを凌ぐためにと贈られた懇念であろう。

後世「高野聖」の活動が低俗化するに従い、聖人と「聖」の関係が語られなくなったのだろう。令和5年は聖人誕生850年に当たり、京都国立博物館で3月25日から「親鸞聖人人生誕850年特別展 親鸞 生涯と名宝」が開催される。「鹿杖」は直接「御影」を見られたらと思う。

編集後記

コロナ禍が三年に渡り、世の中の様子も随分変わってきた。仏壇、墓じまい、直葬等この三年間、随分進行している。当たり前と思っていることが、実は近年始まったことも多い。仏壇屋さん曰く「今の形になったのは戦後のことで、戦争で亡くなった人を祀るため仏壇やお墓を国が奨励し皆が持つようになった」と。「家」の観念も無くなり70年という時を経た結果なのだと、その話を聞いて妙に納得してしまった。

私の両親の寺は一つとも大阪大空襲で焼失した。ウクライナ侵攻から始まる戦争の報道。家、故郷、国を追われ難民化した人たち。歴史は繰り返すと言われるが、私の母もその一人だったのだと今になって気づかされる。

戦後日本人が信じていた価値が揺るがされている。今回の年間特集のテーマ、古代から続く人間の営みの一つである「まつり」に焦点を当ててみた。第一回は縁あって諏訪在住の書家吉澤大淳先生にお願いした。日本列島の中央に位置する諏訪。NHKのプラタモリで紹介されていたように縄文時代最も人口が多く、最も栄えていた地域だという。時代を超えて連綿と伝わる聖なる姿、その大いなる心を伝えていただいたと思う。

合掌

表紙の絵 一灯

2015年作

積尊、成道（悟り）の地アツタガヤでは毎夜、富める人は千灯、貧者は一灯でも

灯明を灯し続けています。お内仏でも灯明（ローソク）を灯し、お線香をあげます。お香は本来、香木を焚いてその場をかぐわしい香りで清めて合掌するためのものです。そのため略式の線香は、浄土真宗では立てずに横に折って焚きます。立てるのは時間計りのようなものです。真宗では自灯明、法灯明というお釈迦さまの言葉がよく使われます。それは自らを灯明（抛り所）にして、お釈迦さまの説かれた教えを灯明（抛り所）にしなさいということ。自らを抛り所にするとは、自分で考える人間になれということになります。「普廣経」には「灯明を燃やし供養すればもろもろの幽冥を照らし苦痛の衆生は此の福德の縁によつて、皆安息することを得ん」と説かれています。

畠中光享（はたなか こうきょう）

日本画家／インド美術研究家  
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは  
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007  
ホームページ <http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)  
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12  
(四天王寺西門交差点 西へ30m)

天岸浄圓 (あまぎしじょうえん)

1949年(昭和24年)生まれ。本願寺派布教使。行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。